



第 110 回例会
報告



ポーランド名作映画ビデオ鑑賞2024

『イェズ・ミニッツ 11MINUTES』 3/9

本例会は合計35名(うち一般24名)参加と盛会でした。本作はイェジー・スコリモフスキ監督による批評家受けのするやや難解な群像劇であるため、映画研究者の坂尻昌平先生に解説をお願いし、また初めての試みとして先生のご希望で同監督の経歴など前説を語って頂きました。=右写真=

画面に何度も現れる黒い点などは、マクガフィン(登場人物への動機付けや話を進めるためのアイテム)で、ヒッチコックのそれとは違うタイプだと説明があり、ポーランド映画では、一見無関係に見えるものが深い所で繋がっていたり、偶然と必然が裏腹というタイプの映画も多く、事件の偶然性を強調するために用いられているのではないかとのことです。

会場から、ホテルの部屋番号「1111」の意味が問われ、ポーランドの独立記念日ではないかとの指摘もあり、坂尻氏は、監督は愛国心の強い人なので、そういう意味もあるかもしれないと答えました。

アンケートでは「大変良かった」(5点)8名、「良かった」(4点)5名、「普通」(3点)5名で、平均4.2点とまずまず高評価でしたが、「よく分らない」「疲れた」との声もありました。反省点は解説に時間をかけた分、参加者の議論が十分にできなかったことで、開催時刻も含め、今後の課題したいと思います。

(池田光良)



◆アンケートの感想より

良い機会を有難うございました。他のポーランド映画も観てみたくなりました。(50代)	とても面白い映画でした。音楽もカッコ良かったです。(60代)
複雑に入り組んだストーリーに引き込まれました。人生は偶然の上に成り立っている、次の瞬間も不確かだ、何が起こるか分からない、というメッセージでしょうか。(60代)	ついて行くのが大変だった。さまざまな人生を生きる登場人物たちの11分間の出来事が交錯して惨劇へと進んでいく。すごく怖かったです。(70代)
ポーランド映画は全くなじみがなかったが、今回観たことで、機会があればまた観てみたくなった。(60代)	一瞬たりとも退屈しない面白い映画でした。鑑賞できて良かったです！(60代)
鑑賞後、見知らぬ人々の運命(特に悪い)の混んとした交差を感じる作品と感じ、日本と同様に、普通の生活の中にどこか不安や混んを感じさせられる思いを感じました。楽しい作品ではありませんでしたが、非常に面白く鑑賞させて頂きました。(60代)	ポランスキーしか知らなかったので、ポーランド映画をもっと観てみようと思いました。(あ、トリコロールは観ましたが!!) 良いきっかけをありがとうございました。日本の『雪女』のように想像がふくらむ(いかようにもとらえられる)映画でした。(50代)
映像に取り上げられた人物の中で亡くなった人が11人か数えたが、11人は超えていた。何を伝えたいかわからない。しかし「何を伝えたいか(あれかな?これかな?など)を考えさせられてしまう」映画だと思った。シスター、犯罪者、芸能人、善人そうな画家、医者も死んだ。何か意味が?(30代)	現代映画というのか、11分の中にいろいろなことが起きて…ということなのですが(それは現実にもそうなのでしょう)、一つ一つの事象の前が分からないし、事象相互の関連性がよく見えないし、映画としては面白いものではなかった(残って話し合いに参加すればよかったかもしれませんが、時間がありませんでした)。(70代)
既に観ていた作品ですが、この作品は人それぞれに解釈が異なると思います。解説者のみならず、参加者の感想も聞きたかったと思いました。	ひきこまれて見てはいたが、難解な映画だった。一見無関係な人々の人生が錯綜し、絡み合っているのは分るのだが、そこから先がよく分らなかった。(60代)
疲れました。(60代) よく理解できなかった！(80代)	普段観てるものと違い難解な作品でした。ほかの作品も観てポーランド映画少し勉強したい。(80代)
映画はバニシング・ポイント(消滅点)に向って一見無関係に進みますが、最後の最後に繋がる計算づくの展開で、見事なものです。大変面白く見させて頂きました。ポーランドは時々こんな傑作を出しますね。また機会がありましたら教えて下さい。	

イェジー・スコリモフスキ 監督・脚本
2015年/カラー/ポーランド、アイルランド/81分/ブルーレイ 映画研究者の坂尻昌平氏によるトーク